川口隆行
『広島（ヒロシマ）抗いの詩学
――原爆文学と戦後文化運動――』

（琥珀書房、2022）

柴田　優呼（PRIME 研究員）

1950年代は米軍占領後期そして復興期に当たる。双方をまたいで起きた朝鮮戦争により東アジアの冷戦体制が確定した時期でもあった。そうした時代状況の中、広島で育まれた原爆文学と戦後文化運動を追ったのが本書である。「第一部サークル運動論」と「第二部復興批判論」の2部構成となっており、著者の川口隆行は当時を語る資料を掘り起こしつつ、広島の原爆詩人、峠三吉らによる文学的・文化的営みを丹念にたどっている。

最も印象深かったのは、「第一章『われらの詩』における詩作品」における朝鮮戦争と広島の戦後文化運動との関わりである。川口はまず、戦後初期の代表的な原爆文献の一つである今堀誠二『原水爆時代――現代史の証言 下』（三一書房、1960年）の再評価から始める。現代中国史の研究者である今堀が、1949年10月の中華人民共和国の成立と、同年6月に日本製鋼広島製作所で起きた広島で最大規模の労働争議である広島日鋼争議の「敗北」を対比していたことに注目。さらに今堀が同年10月の平和擁護広島大会でも、中国の建国宣言の翌日の開催であることなどを大会中に発言していたことから、「平和擁護大会の原爆禁止宣言を新中国の建国宣言と並ぶような世界史的意義を有する出来事」（川口18、以下著者名省略）とみなしていたと指摘する。

だが川口が注目するのは中国ではなく、平和擁護広島大会に出席していたと今堀が前掲書で記述していた朝鮮人男女の方である。川口の主張は「朝鮮戦争こそが、体験者、非体験者という違いを超えて、原爆体験の表現化を強く促した」「朝鮮戦争という目前の状況に鋭く対峙する意識こそが原爆の記憶を召喚した」（22）ものであるからだ。こうした考えの下、川口は広島で被爆した詩人、峠三吉を再定義する（なお峠は、広島日鋼争議と平和擁護広島大会の双方に関わっていた。峠の作品の数々が広島日鋼争議の現場で朗読され、平和擁護広島大会では、峠自ら議長団代表として原爆禁止宣言を発表していたのだ）。

川口は「『原爆詩人』峠三吉は、当時の文脈に配慮すれば、『朝鮮戦争詩人』とも読み替えうる」（22）と考える。峠の代表作『原爆詩集』に収められた作品「一九五〇年の八月六日」の中に、朝鮮戦争を伝えるニュース映画の存在を読み取った上で、大量の反戦ビラが広島市の繁華街のビルから1950年8月6日に撒かれた作品中のシーンを取り上げ、撒いた活動家の多くが朝鮮人青年だった

ことを、当時の関係者の手記などを参照しながら示していく。

「これまで一般的には、峠を含め広島の若い詩人たちは原爆使用が喧伝されたから立ち上がったのだと理解されてきた。だが、［中略］峠たちは、四〇年代末からの身近な朝鮮人との交流を一つの契機として、朝鮮戦争を自分たちの問題とする認識を深める中で、原爆の記憶を集合的経験として想起したと理解すべきであろう」（35–36）と川口は述べる。そして、こうした経緯が忘れられた背景として「日本共産党の指導下にあった左派系在日朝鮮人は朝鮮労働党の指導下に再配置され」たことや、「『唯一の被爆国』という言葉を自明とするような国民主義的な原水爆禁止運動」（36）を挙げる。峠の作品で描かれた反戦ビラを撒く行為は、元々「戦後広島における反戦・反核運動の起源としてなかば伝説化されて語られもする事件」（33）とされてきたが、これまで「広島における様々な闘争の正統性を担保する作品として、『原爆詩人』峠三吉の神話化を強く促す作品として機能、受容された」（36）と結論づける。

米軍占領後期に広島で起きていたことを様々な資料を読み込んで再構築することで、朝鮮人運動家たちが広島の反核運動及び原爆文学が立ち上がる時期に果たしていた役割に光を当てている。広島で被爆した原民喜、大田洋子、峠三吉の三人はこの時期の原爆文学の代表的な担い手とみなされてきたが、東京に移っていた原や大田ではなく、広島で活動を続けた峠の作品と活動をみていくことで、こうした掘り起こし作業が可能になっている。

「朝鮮戦争詩人・峠」の作品例としては、この「一九五〇年の八月六日」のほか、別名で広島詩人協会の機関紙『地核』に寄稿した「電車線路のつぎ目を見給え」、『原爆詩集』内の「墓標」などを挙げているが、こちらは内容紹介程度にとどめており分析はない。ただ峠の詩集の販売を担うなど、峠が主宰した詩誌『われらの詩（うた）』のようなサークル運動と、地元の朝鮮人活動家とのつながりは深かったと川口はみなしている。

原爆と朝鮮人の関わりと言うと、彼らの被爆体験を中心にしたものが多かった。だが朝鮮人活動家が日本人と協力しながら、当時の広島平和記念式典が中止された後の反戦運動を主導していたという能動的な姿が明示される意義は大きい。それは社会における彼らのイメージや位置づけだけでなく、マイノリティとしてのアイデンティティ形成にも関係するものだ。被植民者として抑えつけられていた行動が日本の敗戦を経て社会の中でどう変化していったか、今後さらなる掘り下げが期待される。なお今堀の前掲書には記述がないことなどから「こうした事情が後の日本人による証言ではほとんど語られない点に問題の一端がある」（34）とも川口は指摘している。なぜ語られてこなかったのか、その分析や考察も加われば仔細がより立体的にみえてくるだろう。

川口によると、『われらの詩』での朝鮮人の作品は子供が作った2点しかなかった。背景として「広島では五二年前半までにめぼしい朝鮮人の運動家が根こそぎ逮捕された」「激しい反戦運動は、自らの経験を自らの言葉で主体的に語る表現者としての道を閉ざしもした」（36）ことが関係したとみている。実際、朝鮮人活動家らが峠に与えた影響を峠の作品を通じてみていくだけでなく、こうした行動が彼ら自身の内面形成にどう影響したか、より主体的な像の記述がなければ、日本人の原爆表現の契機を語るために彼らを客体化して終わってしまう。ただ彼らの声を直接伝える資料の発掘はもはや困難なのかもしれない。[1]

一つ気になるのは、原爆体験の表現化に大きな影響を与えたとする朝鮮戦争について川口は何度も言及しているが、そのさなかの1952年4月に発効したサンフランシスコ講和条約で、朝鮮人の日本国籍喪失が確定したことについては触れていないことである。そもそも日本の植民地統治下での彼らの経験の言及もないのだが、実際彼らは1950年8月6日に講和条約締結後と同じような意味での「朝鮮人」として活動していたのだろうか。川口は峠の詩「墓標」は、「朝鮮のお友だち」

と「日本の子供たち」が一緒に、自分たちは「ひろしまの子」だ、と原爆で殺された子供たちに語りかける体裁を取っていると述べている（ただし作品中、既に彼らは「朝鮮人」という他者としてくくられているが）。

当時の彼らの不確定で曖昧な立場性には、国家や民族を縦割りにした物語に収まらない過剰さがある。それこそが「もう一つの、ありえたかもしれない戦後広島の姿」（37）につながるものとも言える。彼らが外国人という周縁的な場に追いやられることなく、日本の内側から引き続き様々な社会運動をリードする道が確保されていたとしたらどうだったろうか。アメリカで公民権運動がフェミニズム運動を側面から支えた歴史に鑑みると、長い目で見て日本社会がこれほど単一民族思考、世界最底辺水準の家父長制意識に陥る状況にはならず、より多様で寛容な社会になっていた未来もあったのではないかという考えも頭をかすめる。

第一章には出てこない朝鮮人の声を違う形で掬い取っているのが「第五章『ヂンダレ』と『琉大文学』に見る広島・長崎・ビキニ」である。『ヂンダレ』は大阪の朝鮮人青年が1953年に発刊したサークル詩誌で、同じく同年創刊の琉球大学の文芸誌『琉大文学』と共に「広島という場所やイメージの問題を外部から相対化しようとする視線を剔出する」（10）目的で取り上げられている。

作品としては例えば、マーシャル諸島でのアメリカの水爆実験を題材にした鄭仁の詩で、タイトルはそっけないほど直截的に「実験」、詩の最後は「世紀の破滅か？／でも愉しみたい……。」（146）という言葉で締めくくられるという、題材に対する距離感が露なものなどが登場する。ここで「愉しみたい」とする対象は、「鄭仁が同じ号に発表した『パチンコ店』を参照すれば、アメリカ文化の象徴とされたジャズや退廃文化の代名詞であったパチンコなど日常に溢れた娯楽かもしれない」（147）と川口は評している。ただ、朝鮮戦争とその帰趨が大きく影を落とした内面、さらに言えば戦前は植民地支配を受け、戦後は一方的に外国籍にされた経緯、日本社会における日常的な構造的差別の継続、朝鮮半島の軍事的・政治的分断の固定化などといった文脈、あるいは本国との関係上、日本語ではなく朝鮮語で書くべきだと批判される立場に置かれるという、二重のマイノリティとしての立場性を考慮に入れずに日本のどこにでもいそうな青年像と重ね合わせることで、水爆実験に対するこの皮相なほどの距離感を読み解くことは可能だろうか。そこには倫理的正しさに対するそこはかとない拒否感や、脅威や権威に対するかすかな抵抗意識もほの見える。

とは言え、どんな文脈をどこまで掘り下げるかは研究次第でもあり、本書は広島に軸足を置いた1950年代の原爆文学とサークル運動、戦後復興を考えるという点で一貫している。「第二部復興批判論」で川口が論じている山代巴や山野音代らにしても、ジェンダーよりそうした問題群が前面に出ている。これは研究スタイルまたは研究目的の違いであり的外れかもしれないが、アメリカなど英語圏の文学や文化研究などの分野で、人種・民族・ジェンダーなどの面でマイノリティの立場で研究してきた自分が折りに触れてひしひしと感じたのは（日本でもジェンダーマイノリティではあるが）、世界各地から参集したマイノリティの研究者の中には今現在の自分たちの社会的位置に対する逼迫感に基づく視点を必ずしもダイレクトではない形で照射している人たちが多くおり、彼らが議論の場で漂わせる緊張感が生み出す輻射熱とでも言うべきものは、形の上では主流派に属す人たちも無視できないものになっていることだ。集団と個人の相互作用が織りなすそうした場は一種のサークルとも言え、人種・民族・階級・ジェンダー・性的指向などを交差して考察するのがある種の共通知となっており、そうした実践行為が長年続いている。

それが習わしだった者からすると、今よりずっと色濃く家父長制的思考が規範化されていた戦前を経て、男女平等が措定された新憲法が浸透していった1950年代に、上記の女性の書き手たち

が日常的に交渉していたジェンダー配置の状況を突っ込んで分析することなく接近するのはやや単線的に映る。第一部で川口は、引地きみの「だいこん」や杉生直子の「古い家」を取り上げ、引地の作品に「身体に刻まれたジェンダー規範の律動とそれへの懐疑」（37）を見出す。そして「引地や杉生の問いをきちんと受けとめる必要がある」（42）と結ぶが、そこで定立された目線が第二部で充分に追求されたとは言えない。長い間声を奪われてきた集団に属す個人が発話を試みた時、その属性ゆえに直面する障碍の何重もの分厚い膜を、もっと丁寧に腑分けする必要があるのではないだろうか。とりわけ農村社会での活動において彼女たちが男性の書き手と同じような体験をしていたとは到底思えず、その点を前景化せず埋没させること自体が根強いジェンダー差別構造を敷衍してしまう恐れはないのだろうか。元々男性による指導が規範化していたサークル運動ではなおのこと、彼女たちの表現の場、及び研究者による分析の場においても、男性優位の構造を知らぬうちに繰り返してしまわないよう注意が必要だ。[2]

本書は広島市立図書館が峠の関係資料として所蔵していた『われらの詩』などのアーカイブ調査を基軸にしたものである。そのためか英語などの外国語の参照文献は含まれていない。だが英語圏の人文系学界では人間と動物の関係性についての理論的研究は近年の一大分野であり、膨大な蓄積がある。「第三章動物たちの原爆文学」での峠の作品群の分析において、川口がこうした文献の一部を参照していれば理論的な下支えとして有益だったと思われる。気になるのはこの分野に限らず、優れた外国語文献の日本語への翻訳が近年あまり進んでいない様子であることだ。日本語文献だけに依拠して研究した場合、今後も類似したことが起きると思われる。これは拙著で批判したgeographically-organized knowledgeが再生産されている状況ではないのだろうか。[3]

また川口は「第八章カタストロフィと日常の交差」で、ヘイドン・ホワイトの中動態を援用したジョン・W・トリートの議論を参照している。その上で「『被害と加害の流動する記憶』の場とは、誰が加害者で誰が被害者なのか截然としないばかりか、現在と過去、生と死さえも流動する、だがまさにそれらの分節化が行われようとするカタストロフィの現場であって、それは書く行為、あるいは読む行為によってあらためてたどりつくほかない現場とも言えよう」（215）と論じる。だがホロコーストや近代の表象に最適なのは中動態だとしたホワイトの議論は、欧米の人文系学界で強い批判を受けた。ドミニク・ラカプラは中動態の安易な一般化は問題だとして、中動態による発話でいかに証言の真実性が担保できるかという問題のほか、加害者と被害者を一緒くたにして分別不能にし、つまりは行為主体と責任の所在が骨抜きにされる危険性を指摘している。[4] リオタールをはじめ、表象の領域を法と倫理や道徳共同体の外側に置き、なし崩し的に区別をなくしていくことにファシズムとの近接性をみる批評家も多い。[5]

最後に、「戦後日本という枠組みを超えた、東アジア的光景の広がりに広島の街を置きなおす」（36-37）のが本書の目的の一つであるなら、朝鮮戦争下の広島における朝鮮人と日本人の関わりを見直すだけでなく、朝鮮戦争の当事者でもあったアメリカと中国（韓国と北朝鮮だけでなく）をも視野に入れて検討する必要はなかったのだろうか。とりわけアメリカは広島の「東アジア的光景」を作り出していた主要なアクターだった。川口によると、広島日鋼争議は「米ソ対立の激化によるGHQの占領政策の転換の余波が広島にも及んだ」（16）ものであり、反戦ビラを市中に撒く抗議行動の引き金となったのも「朝鮮戦争への反対運動が激化することを懸念したGHQ参謀第二部部長チャールズ・ウイロビーは、一九五〇年八月六日に予定されていた第四回広島平和祭（現広島平和記念式典）の中止を指令」（29）したためだった。だがこれらに対しては事実関係を記述するだけにとどまり、そうした状況と斬り結ぶ動態的な論考がない。まるでアメリカのこうした介入

は人為的な所作ではなく、所与の前提か不可避的に発生した変更不能な条件であるかのような印象を受ける。こうした傾向は原爆文学という分野にとどまらず、広島についての論考でよくみられるのが実情であるが、東アジアで冷戦が始まったまさにその時期、朝鮮戦争を取り巻く、より広範で多様なアクターが織りなすダイナミズムがもっと描かれてもよかった。

註

(1) 黒川伊織は、朝鮮半島に向けた軍需物資を輸送する神戸の日本人労働者に「日本の友たちよ」と呼び掛ける詩を書いた金海光や、朝鮮人や台湾人の仲間に指導を受けて雇用主の不当行為に抗議する日本人労働者の姿が出てくる、どい・よしのぶの作品などを論じており、広島ではないが、当時の朝鮮人と日本人の関係性の一端が伺える。以下参照。黒川「東アジアの『熱戦』とサークル運動——朝鮮戦争下の抵抗の経験」、宇野田尚哉、川口隆行、坂口博、鳥羽耕史、中谷いずみ、道場親信編『「サークルの時代」を読む——戦後文化運動研究への招待』(影書房、2016年)、45–62頁。

(2) 中谷いずみは、女性の書き手による生活記録運動の中で、政治的に漂白された女性のイメージが広く受容され、男性たちの戦闘的な運動とは分離されていった過程を明らかにしている。以下参照。中谷「サークル運動の中の生活記録」、前掲書、217–242頁。

(3) Yuko Shibata, *Producing Hiroshima and Nagasaki: Literature, Film, and Transnational Politics* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2018)［柴田優呼『プロデュースされた〈被爆者〉たち——表象空間におけるヒロシマ・ナガサキ』（岩波書店、2021年）］参照。

(4) Dominick LaCapra, *Writing History, Writing Trauma* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2001), 26.

(5) Saul Friedlander, ed., *Probing the Limits of Representation: Nazism and the "Final Solution"*（Cambridge: Harvard University Press, 1992）［ソール・フリードランダー編、上村忠男、小沢弘明、岩崎稔訳『アウシュヴィッツと表象の限界』（未來社、1994年）］、Jean-Francois Lyotard, *The Differend: Phrases in Dispute*（Minneapolis: University of Minnesota Press, 1988）［ジャン＝フランソワ・リオタール著、陸井四郎、小野康男、外山和子、森田亜紀訳『文の抗争』（法政大学出版局、1989年）］などを参照。